



学校法人
浪速学院
<http://www.naniwa.ed.jp/>

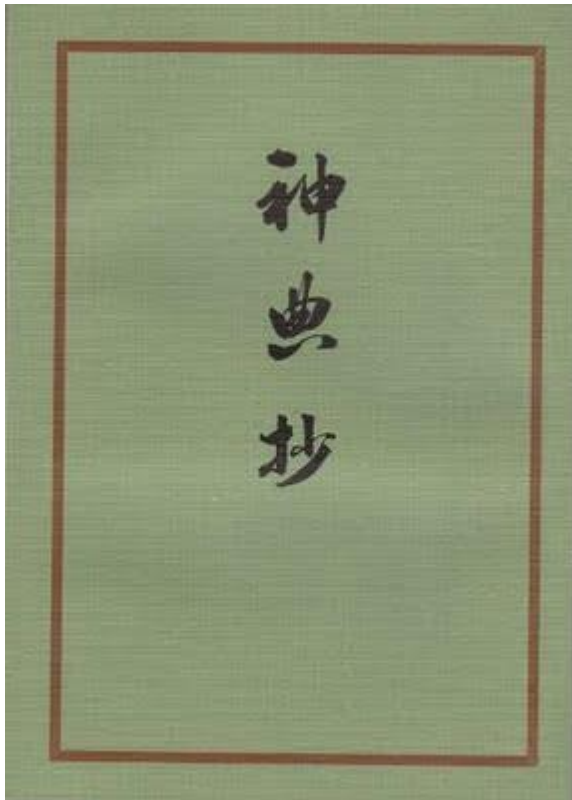


浪速高等学校

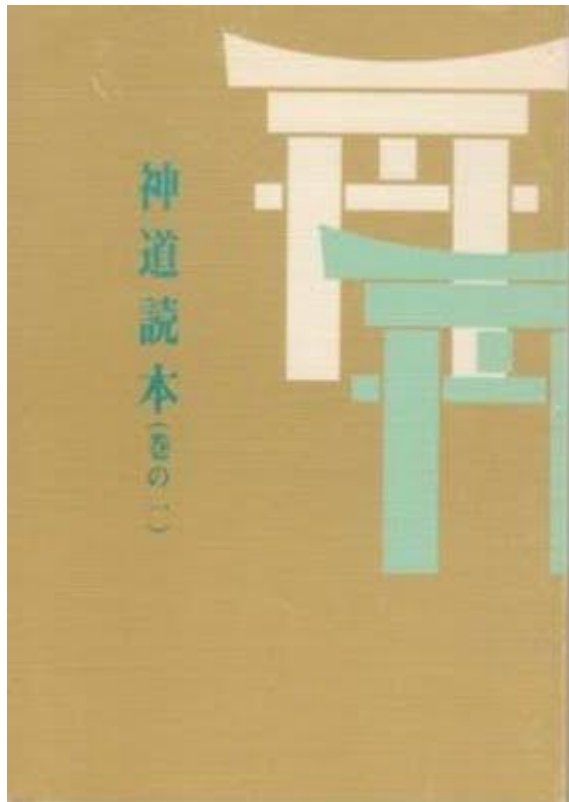
浪速中学校

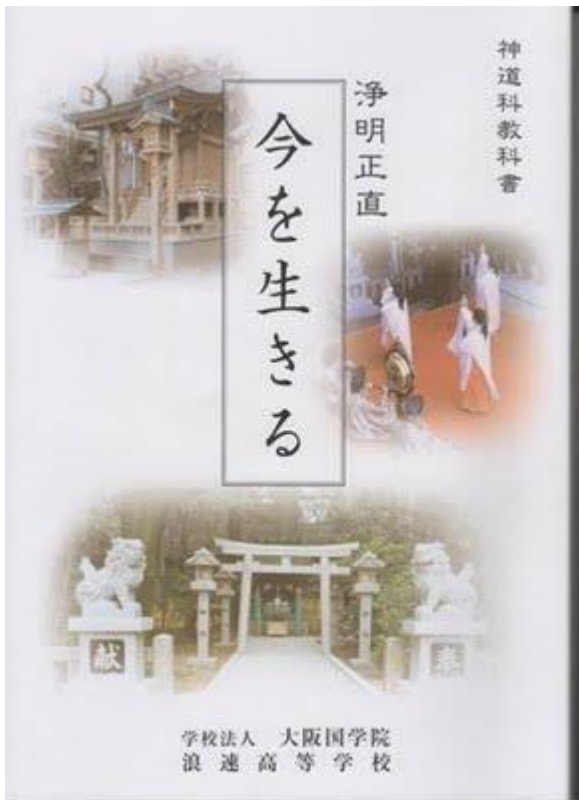
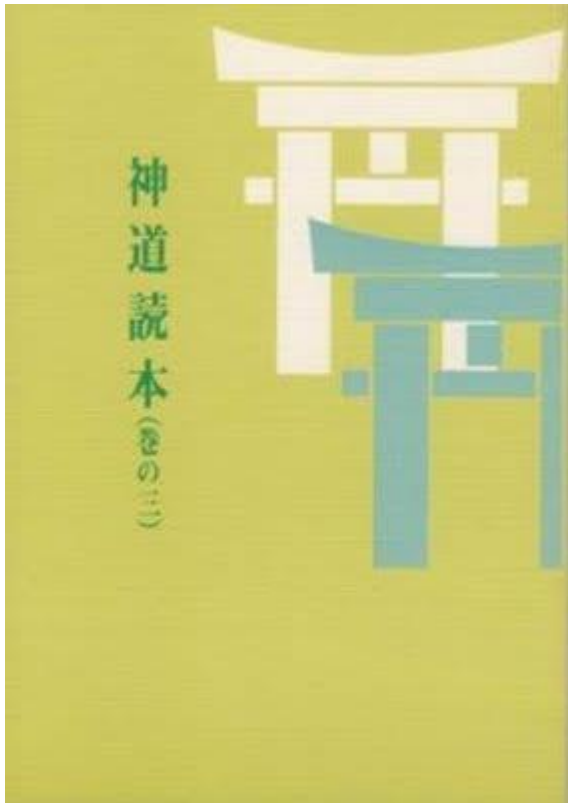
本校の歴史その23:「神道の教育」

No.33 木村理事長・学院長 平成23年度公式メッセージ
(平成23年9月7日アップ)



本校の歴史その23
「神道の教育」





- ・ 私は本校の歴史において「神道教育」がどのように展開されてきたのか、大いに関心があり例によって40年史、50年史、60年史、70年史、80年史と周年史を目で追っていった。
- ・ 大正12年に神社神道の学校としてキリスト教の桃山学院、仏教浄土宗の上宮高校に続いて産声を上げた「惟神の道(かんながらの道)」を標榜する私立高校であっただけに「体系的な神道教育」が整備されていたはずと考えたが実態は私流の表現で言えば「神道の色彩を濃くせずおぼろげに展開」していたと言える。
- ・ 敗戦後3年経った昭和23年4月1日に学制改革で旧制浪速中学校は新制浪速高等学校として改称され新制浪速中学校を併設して新たに出発をした。そして昭和27年4月1日、正式に「神道科を教科課程に加える」としたのである。創立後30年も経ってようやく神道科の科目が設定されたのである。
- ・ 全学年に週一時間の必修科目だから3年間で3単位の履修である。勿論これは学校設定科目であり、学習指導要領に基づくものではないが、これで神社神道の学校としての骨格というか体面は保たれている。その神道科教育が今に続いているのである。
- ・ 神道科の授業が始まった翌年の昭和28年に今日、我々が日常目にしている神社の神殿が竣工し遷座祭が行われている。そしてその翌年の昭和29年にこれ又今に続く「伊勢修養学舎」が開始された。このように戦後暫く経って本校は「神社神道の学校としての有り様」を具体的に「バタバタ」と言っても良いくらいに実践し始めたのである。
- ・ これは私にとって不思議と思えることだった。神職養成と経済的に困難な家庭の子弟教育を目指して財団法人大阪国学院が創立した旧制浪速中学校であったがその創立の当初から第二次世界大戦終了まで「ゆるやかに、おおらかに、陰に陽に」の形で神道教育を実践していたのである。
- ・ 勿論「伊勢大廟」への参拝は年に一回はあり、前号のブログで書いたように遠足は「御陵参拝」を入れ、結構多い外部の方の講演会には神職の方をお呼びしてお話を聞くなどはあったがそれは授業のこま数に入った教育課程のものではなかったのである。
- ・ 前述したような敗戦後の昭和27年から29年にかけての大きな動きの背景にあるものは戦後の統治システムの大幅な改編があり「民主的」「民主主義」の言葉の元に戦後の新しいスタイルの構築を求められて、困惑していた当時の理事者や教職員の「危機感」が背景にあったと私は想像する。
- ・ 戦争に負けたが故に今ここで日本の文化や伝統、そして大きな意味で「国体の保持」に意識が行っていたことは間違いないだろう。戦前を全て否定し「デモクラシー」を叫んで一体この国は何処に向かうのかと憤然と神道科教育を正式に授業に入れ学院神社を建て、伊勢修養学舎を始めた先人の「骨太さ」に私は大いに敬意を表する。素晴らしいことだ。
- ・ 40年史には戦後占領下の教育として一文が残っているがこれを読むと当時の学校現場の実態が読み取れる。「教育の民主化」が叫ばれGHQの軍政部が各校を「巡視検分」して様々に指摘をする。
- ・ 教職員は審査を受けて「適格判定書」を受けて、教員免許状の改正で再教育の講習会や高校、中学の1級免許状を得るために「認定講習会」も開催されている。公立では男女共学が求められ、頭髪は自由と規制されなくなり、生徒の服装は「自由か制服か」でホームルームの議題になったりした時代であった。
- ・ このような面は社会一般にも蔓延していき人々は規律節制を失い、秩序が乱れて他人に及ぼす妨害迷惑を顧みない様な生活態度が随所に見られたと40年史は書いている。ここまで学年史に書くと言うことは「本校ではちゃんと教育していく」という決意とその為の神道教育が始められたと私が考える由縁である。

- ・ 50年史の対談集において増田米蔵さんという卒業生は以下のように発言されている。“私は昭和21年の入学でした。そして27年から神道科の設置になり時は混乱時代でしたから、先生方も自信を失われ一番難しい時でした。幸い私は中学から高校まで6年間お世話になりました。・・・。”とある。
- ・ 又同じく石井康夫先生という国語の教師は次のように述べている。“私は着任して9年目になりますが他校から本校に来て神道の学校と聞いていたのに意外と思ったのは宗教らしい臭いがないことです。禊ぎ、一斉参拝などの行事のほかはこれといった特色が見られません。私は日本人の体臭にしみこんだ古いものが無ければならない。新しい神道教育を普及させて欲しい・・・」のようなコメントも残っている。
- ・ そして最後に50年史を編集した当時の校長である浅田光男先生が対談を締めくくっておられる。“私の使命感は神道精神を生かし。現代激動する中で、生徒諸君に如何にこの精神を浸透させるかにあると思います。神仏を畏れ、純粋な精神を持つ機会は必要です。私は何らかの形で生徒に知らせたい。神道の研究は難しく「大らかさ」は分かりにくいけれどもそれを分からせるのは私の仕事です。”
- ・ まさしくこの浅田校長の言葉のとおりであり、それは50年史から更に40年経った今でも変わってはいない。私はその「たいまつ」を引き継いで神社神道の精神を生徒に伝えるべく頑張っており改めて決意をしたのである。
- ・ 神道科の授業の教科書であるがこれも変遷している。まず昭和34年に「神典抄」という冊子みたいなものが作られている。「はしがき」に書かれているように従来行われていた資料を集めたものの収録集と言える。
- ・ 古事記、日本書紀、万葉集等のエッセンスを収録したもので私も目を通したが用語も古語であったり旧仮名遣いで昔の高校生はかなりレベルが高かったとも言えるが、今風に考えれば教科書としては体を成していないと思える。副教材なのであろう。
- ・ 当時の管理職や教員もそのことを感じていたのか、「本格的な神道科の教科書の作成」に着手することになった。それが「神道への理解」である。第一冊目は昭和38年10月に岩本徳一國學院大學教授が監修をして作成された。
- ・ 続いて当時理事長であった寶來正信先生は創立40周年記念事業の一環として前述の「神道への理解」をわずか1年で改版出版された。これが長い間使用されてきた。表紙には岩本教授の監修の文字が入り発行者は浪速高等学校から「浪速学院」に改められた。昭和44年4月30日初版発行となっている。私が大学を卒業した年のことであった。
- ・ 60年史には当時の神道科の教諭である見村先生が「神道の授業」として一文を寄稿されているが、簡素にした的を得たものとなっている。是非お会いしてみたい気がする人物である。
- ・ しかしこの「神道への理解」は20年余の後に当時の理事長足立信治先生の時に「神道読本」として巻の1から巻の3まで3分冊にされて改められた。理由は「神道の理解」が高校生にはやや高度に過ぎると言うことであったと一文がある。
- ・ 昭和63年4月1日に初版が発行され平成3年には第5版まで増刷されている。この時の編集者には現在の中学校教頭の竹島秀二先生が名を連ねている。神道科の見村先生をリーダーとして再編されたものである。
- ・ しかしこの3分冊の教科書は使い勝手が悪かったと見えて結局3分冊は一体化され「神道読本」となった。平成17年4月1日に第一版が発行されている。中々上手く編集された神道の教科書であったと思うが、時代は「道徳教育」の問題が教育界で議論されるようになってきた。

- ・ 平成19年に着任した私は議論されていた「教育基本法」の改定とも連動し、道徳教育と神道教育の部分的な合体を目指して神道教育の改変を目指したのである。国や郷土を愛し公共心を高めていくことも神道教育の柱の一つにしたかったのである。
- ・ 大阪府神社界を巻き込み、チームを組んで編集作業を行い2年と言う時を経て平成22年4月1日、第一版を発行した。改定に内容は別途の機会に譲るが大きさも従来のB5サイズからA4サイズに拡大し、表紙には正式に「神道科教科書」校是である「浄明正直」の文字を入れて正式タイトルである「今を生きる」とした。
- ・ この「今を生きる」が今や校長たる私の生徒に伝える根本儀になっており昨年の伊勢修養学舎から高校1年生対象の校長講話のタイトルも「今を生きる」として連動させている。
- ・ しかし改革のスピードが速いだけにこの1年だけで学校法人名が大阪国学院から浪速学院に変わったり、新しい「遊学の広場」には「さざれ石」も設置された。これらを補足改定しながら道徳教育も兼ね備えた神道教科書として今後継続的に質を高めて行きたいと強く念願している。
- ・ 教科書編集責任者として名前を連ねている神道科の森川主任教諭は「中々の出来る人物」だけに必ずや期待に応じてやってくれるだろう。たとえ半ページであっても「いじめ」「虐待」などの記述も欲しい。浪速の神道教育の教科書が評判を呼ぶようなものにしていきたい。